

7. いのる—信仰—

* 「民俗知識 folk knowledge」あるいは「兆占禁呪」

* まじなう：無限の「欲望」と有限の「手段」のあいだ

- ・ 呪術 magic：超自然的存在の力をかりて何らかの目的をとげようとする行為
- ・ 模倣呪術 (imitative magic)：類似の原理 (ex. 雨乞いに水をまく)
- ・ 感染呪術 (contagious magic)：接触の原理 (ex. 他人の毛髪を使って呪う)

* いのる：無限の「世界」と有限の「個」のあいだ

- ・ 宗教 religion：「超越的絶対者」「神聖なるもの」に対する信仰 belief＋行事 practice
- 不可避のトートロジー：「超越的」「絶対者」「神聖」…とは？

* 宗教の分類

- ・ 創唱 (founded) 宗教／自然 (natural) 宗教：教主、教義、経典、教団の有無
 - ・ 世界 (world) 宗教／民族 (ethnic) 宗教：信者集団の属性
- 民俗学の主たる関心は「民俗宗教 folk religion」「民間信仰 popular belief」

* まじなう／いのるの「日本的」特徴

- ・ 汎神論的性格：アニミズム (animism)、多神教 (polytheism) ／一神教 (monotheism)
- ・ 状況的性格：タマとカミ、神と妖怪、御霊信仰…
- ・ 重層的性格 (シンクレティズム syncretism)：神仏習合

* 宗教進化論(呪術→宗教→科学)の破綻

		超越性	体系性	統御性
・ 必要性和統御可能性のギャップ				
・ 理解欲求と理解力のギャップ	呪術	○	×	○
・ practical と magical の連続性	宗教	○	○	×
→遍在する「呪術・宗教的なるもの」	科学	×	○	○

* 文献

阿満利磨 1996 『日本人はなぜ無宗教なのか』 ちくま新書

井上智勝 2013 『吉田神道の四百年：神と葵の近世史』 講談社

岩井洋 2003 『目からウロコの宗教』 PHP 研究所

岩田文昭・碧海寿広編 2020 『知っておきたい日本の宗教』 ミネルヴァ書房

梅棹忠夫他 1976 『神々の分業：日本人の宗教と信仰心について』 梅棹他編 『日本文化と世界』 講談社現代新書

大谷栄一他編 2018 『日本宗教史のキーワード：近代主義を超えて』 慶應義塾大学出版会

末木文美士 2006 『日本宗教史』 岩波新書

関一敏・大塚和夫編 2004 『宗教人類学入門』 弘文堂

藤田庄市 1988 『神さま仏さま 現代宗教の考現学』 アスペクト

が旅行記念のようにして貰ってきた護符の類がぎっしり、同じ聖なる空間に詰めこまれているのだ。

そういう点は、だいたい納得したようだが、お稲荷さんの説明の段で、留学生たちはなかなか理解できなかったようだ。お寺の稲荷は、この区画の土地を守護する神霊なのである。そしてその本体は狐であるという点だ。朱の鳥居がずらりと並び、そしてお馴染みの狐のミニチュアが奉納されている。この稲荷の祠は、日本中どこにもある。おそらく日本でいちばん多い祠の数であろう。

そこでなぜ日本人は狐を神に祀っているのだということになる。それに答えるためには膨大な稲荷信仰史をひもとかねばならなくなる。

東京の羽田空港の駐車場には、いまでも厳然と朱の鳥居が立っている。空の玄関の入口に鳥居があるのだから象徴的だ。ところが社殿の姿は近くにいつこうに見当らない。それもそのはずで神社は空港に入る高速道路と川をへだてた羽田町に鎮座しているからだ。羽田空港が創設されるにあたって、かつてこの地に営まれた鈴木新田の村全体が、羽田稲荷ともども移転させられた。ところが、この稲荷の鳥居のみ頑として動かない。もし移築させようとすると、かならずその工事に祟りがある。以来そのままに放置された状態が続いているわけだが、近年も鳥居

だけでは恰好がつかないので動かそうとすると、不思議と飛行機事故が重なるそうで、依然そのままなのである。

かつてこの地は、多摩川河口部の干潟で要島とよばれ、うっそうと草木が茂り、狐が数多く徘徊していたのである。天明年間以後、名主鈴木弥五右衛門が新田開発を行ない、その折、土地神として稲荷を祀った。追いつめられた狐たちは人によって神に祀り上げられたわけである。穴守稲荷とよばれたのも、狐の棲息した狐穴からきているのだろう。

ただこの地は埋立てた開墾地であるため、堤防が築かれたのであり、稲荷も堤の上に祠があったらしい。『穴守稲荷神社縁起』には、天保初年に暴風雨がおそいかかり、堤防に大穴を開け、いまにも浸水しそうになった時、稲荷がこれを未然に防いでくれたと記している。

いずれにせよ、稲荷はここに住む農民と漁民たちの守護神として意味をもっていたのである。ところが都市化に伴ない、近郊地として春は潮干狩、夏は海水浴場として賑わうようになり、おまけに鉱泉も出て旅館や料理屋が立ち並ぶに及んで、レジャーをかねた参拝人がどっと増えた。そして「羽田ではやるお穴さま」とうたわれる流行神に化した。病氣治しや商売繁昌、腰から下の病いと、靈験は機能化する一方になる。現在では穴の名称から、競馬必勝の靈験もあるそうだし、航空会社の安全護符も出している。

iii

iv

こうなると、かつてこの地に住む人々が素朴に狐を祀ろうとした意味は完全になくなっていくのである。ところがなお移転に反対する強烈な霊力があり、バカバカしいと思いつながら、なお神を恐れている気持が一方にある。

つまり狐の霊を祀るアニミズムの世界がかつて日本人にあり、それはいまでは競馬必勝の神にもなっているが、実は祀る側の方は本体はどうでもよいというわけである。祀る人にとっては、その時のご利益がもっとも求められるものであり、祀られている神の本質をどうこうするつもりはない。だから狐を祀っていたということになると、ヘエーッというところで終わる。

日本の神や仏についての研究は、従来も数多くある。それには立場が二つあった。一つは伊勢や出雲など神社神道が確立されて、理論的にも体系だった信仰をひもとくやり方である。他は名社大社の類はさけて、町や村の道ばたに何気なく放置されている正体不明の小祠を拠点として研究するやり方である。民俗学的立場はもちろん後者にのっとるべきものであるが、実はその対象は、ここで指摘したように、あまりにも雑然としており、かつ小祠ごとに、さまざまな人々の心の動きが背景にあつて、複雑である。それらを一つ一つ丹念に資料化してきた民俗学の蓄積があるが、その中から日本人の神とはどういう性格をもつものかという課題を究明することは、至難の技だとも思う。

はじめに

しかし何となく分かることは、日本の神というものの具体像は、いつも人の側のさまざまな思惑に左右されていることである。だから人間の側から神の姿をとらえるという手がかりがあるにちがいないのである。

本書ではそこで、ゆりかごから墓場までの日本人の一生の折り返し目に合わせて、そのつど、人がどのような形で神を作り上げていたのかを考えてみることにした。だからまず出発点は、人が誕生する折に、神がどう対応するかを考察することになるだろう。

宮田登 1979 神の民俗誌 吉成新書

vi

v